



TITLE:

樂翁公ノ人口増殖政策

AUTHOR(S):

本庄, 榮治郎

CITATION:

本庄, 榮治郎. 樂翁公ノ人口増殖政策. 經濟論叢 1918, 7(5): 707-712

ISSUE DATE:

1918-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127450>

RIGHT:

雜 錄

樂翁公ノ人口増殖政策

本庄榮治郎

一 徳川時代ノ人口ニ就テハ余嘗テ本誌第二卷第五號まるさす記念號ニ於テ之ヲ論シ、江戸時代ノ後半ニ及ンテハ人口ノ増殖甚タ遅タトシテ寧ロ靜止ノ狀ヲ呈シタルコトヲ説キタリ。而シテソノ原因トシテ當時ノ産業狀態ト飢饉疫癘等ノ災厄、租稅負擔ノ過重、勤儉令ノ影響、生活難等ノ外墮胎陰殺ノ惡風行ハレタルコトヲ擧ケタルガ、コレ等諸種ノ原因ノ中、飢饉ノ影響ハ最モ甚シク享保天明天保ノ三大飢饉ガ、タダサヘ人口増加ノ困難ナル徳川時代ノ後半ニ於テ起リ、カクテ人口ノ増加ヲシテ一層困難ナラシメタルコト明カナルガ、墮胎陰殺ノ弊風モ亦看過ス可ラサル現象ナリシ也。

佐藤信淵曰ク「世上ノ婦人懷胎スルコト多シト云トモ、貧ナル者ハ養育スルコト能ハスシテ

或ハ赤子ヲ陰殺シ、或ハ毒針等ヲ刺シ墮胎スルコトアリ。予四海ヲ遊歴シテ審ニ其風俗ヲ探索スルニ何レノ國モ墮胎陰殺ノ禍多ク、大抵十室ノ邑ニテ小兒ノ殺害スルコト年々兩人ニ下ラス恐ルヘキノ最タリ」¹⁾「奥羽關東諸國ハ殊ニ多シ中國四國九州等モ子ヲ殺ス者多クレドモ、産サル前ニ腹内ニテ密ニ此ヲ殺スガ故ニ、外見ハ殺サザルガ如シ。(中略)當時出羽奥州ノ兩國バカリニテモ赤子ヲ殺スコト年々六七萬人ニ下ラス然レドモ此ヲ驚歎シテ罵ル者ノ有ルコトヲ聞カズ。却テ此異ムベキノ甚キ者ニ非ス乎」²⁾ト。本多利明モ「間引子ト荒シ作りハ箱根峠ヨリ東諸國ノ風俗ナリ、上方中國西國ハ密々ニテ間引子モスルトイヘトモ東諸國ノ様ニテハナク云々」³⁾トイヒ、窓ノ須佐美ニハ庄内地方ニ此弊風アルコトヲ説キ、三木廣隆ノ經國本義ニモ尙總ニ毛常陸江戸近在迄モ間引子ノ行ハルコトヲ記セルガ、其外、司波江漢ハ「紫陽處々ノ子多キ事ヲ欲セズ五子アレハ二兒ヲ殺ス。習ウヲ以テ常トス。人モ怪シマス。(中略)子ノ多キコトヲ欲

1) 論(中)田學士著、佐藤信淵ノ農政學說、47頁)
 2) 本要錄(同上) 濟叢書十二卷)189頁
 3) 西物語(日本總知叢書第七編)260頁
 4) 松崎亮臣著、溫知叢書
 5) 日本經濟叢書十七卷364頁

セサル國、筑前筑後ノミニ非ス、豊前豊後日向或ハ常陸出羽奥州ニ至リテ農夫早ク娶ル故ニ子ヲ産ム事十二過クル。殺スモノ多シ⁶⁾ト説キコガねのはなしニハ關東奥州第九州地方ニコノ風習アルコトヲ嘆シ、農業小兒示教辯ニハ「他國ニテハ人別男子ヨリモ女子多ク當國ハ女子至テ不足ニテ、近頃出生ノ厠、村々ヨリ出シ考ヘ見ルニ男子計多、女子出生ハ十人ニ一人モアルカナシニテ候ハシ。然上ハ女子ヲハ間引事不相止ト聞ヘ候ママ村役人五人組ノモノ心附、女子ノ出生届出候ヤウニ制道イタスヘキ事ナリ」ト説ケルカ如キ、要スルニ當時ニ於テハ墮胎及ヒ殺兒(間引、子かへし、戻す)ノ弊風ハ我國各地ニ於テ行ハレタルコトヲ知ルヘキ也

二 人口問題ニ關スル幕府ノ政策ニ就テハ都市人口ノ集中ヲ防ク爲メ、初ニハ頗ル消極的方針ヲトリ、單ニ歸郷希望者ニ特殊ノ便宜ヲ與ヘ成ルヘク歸郷ヲ多カラシムルニ努メシニ過キサリシガ天保十四年ニ至リテハ「人返シ」ノ方法ヲ實行シ其他ノ取締ヲ嚴ニシ頗ル積極的強制的色

彩ヲ帶フルニ至リシコトハ既ニ説キタル所ナルガ、コノ墮胎殺兒ノ弊風ニ對スル政策ニ就テハ如何トイフニ、余ノ寡聞ナル未タ多クノ事例ヲ舉クルコトヲ得スト雖、當時江戸ニ於テハ墮胎ヲ業トシテソノ口ヲ糊スルモノアリシカ如ク、正徳三年(1646)ノ江戸町觸ニ於テハ看板ヲ懸ケテ子おろしノ商賣ヲナスコトヲ禁シタルガ¹⁰⁾其後延寶八年(1690)八月ニハ墮胎致死ノ醫者ヲ閉門ニ處シ、貞享三年(1686)六月ニハ藥物ヲ用ヒテ墮胎ヲ行ハシメ遂ニ之ヲ死ニ致シタルモノヲ死罪ニ處シ、安永六年(1797)六月ニハ中追放ニ處シタルコトアリ。降テ天保十三年(1842)十一月ニモ市中女醫師ノ墮胎ヲナス者アリ向後ハ依頼人マデモ逐一穿鑿ヲ遂ケ急度處分スヘキ旨ヲ令シタルヲ以テ、墮胎ノ禁遏ハ未タソノ效ヲ奏セサリシヲ見ルヘキ也。¹¹⁾

江戸以外ニ於テハ如何トイフニ、明和四年(1767)十月ノ令ニハ「百姓共大勢子供有之候得ハ出生ノ子ヲ産所ニテ直ニ殺候國柄モ有之段相聞、不仁之至ニテ以來右體ノ儀無之様村役人ハ

6) 春波櫻爭記(日本經濟叢書十二卷)368頁
7) 寫本、著者及年代不明
8) 寫本、著者及年代不詳
9) 寫本、著者及年代不詳
10) 平出徳二郎、子おろし(史學雜誌第五編)

勿論百姓ヘモ相互ニ心ヲ附可申候。常陸下總邊ニテハ別テ右之取沙汰有之由、若外ヨリ相顯ルルニオイテハ可爲曲事者也¹²⁾トアルモ其後ノ效果明カナラス。享和元年(1801)三月ニ植崎九八郎ガ幕府當局ノ手ヲ經テ將軍ニ上リタル建言書¹³⁾ニハ「關東ヨリ奥筋ニテ子ヲマビクト申候テ百姓ノ子ハ一兩人マタハ兩三人モ持候上ハ、出產ノ節直ニ殺シ候コトニ御座候。(中略)近來御料所ノ分ハ少々ツツノ御手當ニテ、子ヲマビクト御停止ニテ大概ハ止候様ニ承リオヨビ申候先ハ宜方ニ奉存候」トイヘルガ、元來コノ上書ハ瀧本博士ノ解題ニイヘル如ク痛切ニ時事ヲ批評シ、其人ヲ論スルニ當リテハ忌マス憚ラズ無遠慮ニ之ヲ褒貶シタル程ノモノナレバ、右ノ一節モ決シテ謬妄ノコトニアラサルヘク、幕府モコノ弊風矯正ニハ多少ノ注意ヲ拂ヒ、アル地方ニテハ多少ノ效果アリシカ如ク考ヘラルルモ、未タ一般ニ大ナル效果ヲ擧ケタルモノトハ見ルコトヲ得ス、又所謂「少々ツツノ御手當」ナルモノカ果シテ如何ナルコトヲ意味スルモノナ

ルヤヲ明カニスルヲ得サルヲ以テ、幕府ガコノ陋習ニツキ、單ニ事後ノ處分ノミナラス、積極的ニ事前ニ之ヲ防止スヘキ如何ナル手段方法ヲ採リシヤヲ詳ニスルヲ得サルヲ遺憾トス。

三 幕府ノ探レル政策ニ就テハ上述ノ如シ、余ハ更ニ進ミテ樂翁公カソノ封地ニ於テ實行セシ人口増殖策ヲ説カサル可ラス。天明三年(1783)春來氣候不順ニシテ霖雨至リ、夏尙冷涼、七月ニハ淺間山ノ噴火アリ、關東奥羽作毛稔ラス、物情騷然タリシトキ樂翁公ハンノ封ヲ襲キテ白河ニ君臨シ、身ヲ以テ衆ヲ率ヒ質素儉約救荒勤儉ノ政ヲ布キシガ、人口増殖ニツキテモ亦大ニ努ムル所アリキ、既ニ述ヘタルカ如ク墮胎殺兒ノ弊風ハ奥羽其他各地方一般ニ行ハレタル所ニシテ、白河地方モ亦ソノ例ニ洩レザリシガ、公ハコノ陋習ヲ矯正センカタメニ屢告諭ヲ發シテ教フル所アリ。天明四年(1785)ニハコノ陋習ニ混セス、貧ナレトモ子供多ク育テ五人以上ニ至ルモノハ賞トシテ毎年米一俵ヲ賜ハリシガ、當時白川ニ於テハ婦人少ク男子多キニ失シ娶ルニハ

12) 開傳叢書(日本經濟叢書卷十)707頁 德川禁令考、五帙、276頁 德川十五代史、九編、136頁
13) 政策雜收(日本經濟叢書十二卷)422頁以下

財物ヲ出スニ非レハ壯年者モ妻ヲ迎フル能ハサル有様ニシテ、生子多ク舉ラス、民ハ年ト共ニ減シ田圃荒廢スルニ至リシヲ以テ公ハソノ分領越後ニ於テハ人多クシテ婦人迄モ能ク業ヲ勵ミ一向宗ノ信仰上子ヲ害スルノ風ナキヲ聞キ、更ニ命シテ同國ノ婦女ニ旅費ヲ給シテ多ク之ヲ移住セシメ田家ヲ授與シ鰥夫ニ配偶シテ耕織ノ業ニ力メシメ、又墮胎殺兒ノ弊風存スルハ畢竟貧苦ヨリ出タル所業ナレハトテ寛政十一年(1790)リ初産ヲ除キ二人目ヨリ赤子養育ノ爲メ七夜過

キニ金二分、十二ヶ月目ニ又二分、都合一兩ツツ下付シ試ミニ五ヶ年間之ヲ實行セン計畫ナリシガ、同九年(1791)ニ至リ又増テ七夜過ニ一兩十二ヶ月目ニ一兩、都合二兩ツツ下賜スルコトトシ妊婦臺帳ヲ備ヘ、分娩ヲ報セシメ、洗兒ヲ查檢スルノ方法ヲトリシトイフ。斯クテ寛政四年(1793)領内ノ人口ヲ調査セシニ、實ニ天明五年(1795)ニ比スレハ七ヶ年間ニ三千五百余人ヲ増シ新百姓モ追々取立テ城北飯澤ナトハ村落ヲナシ所々ニテ高百石ノ餘モ出來タリトイフ。¹⁴⁾

之ヲ要スルニ公ノ政策ハ一方ニハ婦女ヲ募リテ嫁歸スル所アラシメ、他方ニハ育兒金ヲ與ヘテ陰殺ノ非行ヨリ脱セシメ、且多兒養育ノ勞ヲ賞シ以テ人口ノ増加ヲ計リ相當ノ效果ヲ舉クルヲ得タルモノ也。

以上樂翁公ノ人口増殖策ヲ説キタルニ因ミ土佐山内侯ガ同地ニ盛行セシ墮胎陰殺ノ弊風ヲ矯正センカ爲メ發セシ觸書ヲ示サンニ、寶曆九年(1769)閏七月ニハ

一、古ヨリ貧窮ニテ數子ヲ養ヒ候儀難成者ハ子出生ノ後又ハ胎内ニテ殺シ捨ル事有之、且ツ養ノ憂ナキ輩ニモ儘有之候事ニ候。然ルニ習俗トナリ候テハ右等ノ仕業モ不忌憚様ニ可成行候誠ニ天道ヲ不忌儀人タルモノノ致間敷事ニ候。

一、ニタ子三ツ子ヲ産ミ候者有之時ハ恥辱ナル事トシテ押シ隱シ或ハ子ヲ殺シ候事モ有之候素ヨリ繁榮ノ儀ニテ全忌嫌候儀ハ無之候、下賤ノ者不辨道理故トハ申ナガラ天ノ明ヲ捨候段愚昧ノ至可恐事ニ候。

14) 羽林源公傳(日本偉人言行資料取扱26-29頁、日本文庫第五編取扱25-28頁)
御行狀記料(日本偉人言行資料取扱)143-4頁。大日本農政類編賑濟69頁
上野南城著、白河樂翁(偉人史叢)37-8頁 三上參次、白川樂翁公ト徳川時代

右條々ハ義理ヲ捨、人追ニ背キ候事共ニ候於國
内決テ無之様ニ屹度可憚者也。

ト令シ尙寛政十年(1798)三月文政六年(1823)八
月ニモ同様ノ達示アリシカ、未ダコノ惡習ヲ洗
除スル能ハス、明治ノ初年ニ至リ舊藩知事深ク
之ヲ憂ヘテ諭示スル所アリシトイフ。詳細ハ吳
文聰氏著戦後經營人口政策五七頁以下ニアリ。¹⁵⁾
就テ看ル可シ。

尙前掲ノ女子ヲ間引ク習慣アルコトヲ説ケル
農業小兒示教辯ニハ「困窮ノモノ小兒四歲迄養
育料御手當トシテ十ケ年間、御上ヨリ年々夫食
ヲ被下置誠ニ難有事ニテ候。畢竟間引戻ス事人
倫ニアルマシキ仕業ユヘ歎ケ敷思召テノ御趣意
ニテ候」トイヘルヲ以テソノ何レノ地方ナリシ
ヤ明カナラスト雖、著者ノ國ニ於テハ、樂翁公
ノ場合ニオケルト同シク、育兒金ヲ與ヘテコレ
カ弊風ノ防遏ニ力メシコトヲ見ルヘク、其他ノ
地方ニ於テモ或ハ同様ノ方法ニヨリ人口ノ増殖
ヲ策セシモノナキニ非ルヘキ也。

四 翻テ樂翁公ノ著國本論附錄卷二¹⁶⁾ヲ見ルニ

「人民をふやす事」ノ條ニ於テ周禮ニ所謂大司徒
小司徒、司民等ノ職ヲ述ヘ安民ノ要ヲ説キタル
後、「漢惠帝六年民ノ女年十五以上ヨリ三十マテ
ノウチニイマダ嫁セサルモノアレハ一人ニ五算
(一算ハ錢^{百二十也})ヲ出サシム。後漢章帝元和二年正月
勅シテ民ノ懷妊セルモノニハ胎養穀トテ米ヲ一
人ニ三斛(一斛ハ^{十斗也})宛賜フ、其上ソノ夫ヲ賦役ニ
ツカハス算ヲ出ス事ヲ一年ユルス、同三年、民
ノ子供ノ兩親屬類ナキ者ト貧シクシテ子ヲ養フ
事ナラヌ者ニハ上ノ廩米ニテヤシナフ」ノ事實
ヲ舉ゲ「使をやりて民の困窮を惠む事」ノ條ニ
モ「理宗淳祐七年慈幼局ヲ始ム、子供アリテ養
フ事ノナラヌモノハ其子ヲミナ此内ニ入シム、
又貧窮ノ者其子ヲ養ハント思フ者ヲバ上ヨリ雇
ヒテ此局ニ入レ子孫ニ乳ヲ吞シム、皆上ヨリ米
錢ヲ賜フ」ト説ケルヨリ觀レハ、公カ實地ニ行
ヒシ政策ハモトヨリ公ノ聰明ナル思料ノ結果ナ
ルヘシト雖モ一面ニ於テハコノ支那ノ事實ニ關
スル知識ニ據ル處、必スシモ無キニ非ルヘキ也。
尙、序ナガラ公ト略同時代ノ者ト考ヘ得ヘキ

15) 日本社會辭彙、下卷845頁ニモ出ヅ

16) 樂翁公遺書上卷取收

學者ノ中、公ノ實行セシ所ト略ホ同様ノ方法ヲ主張セルモノアリ。例ヘハ本多利明ハ人口問題食料問題ヲ解決スヘキ根本策ハ開國貿易又ハ屬島開發ニ存スルコトヲ説ケルガ、殺兒等ニ對スル應急策トシテハ、「人民ヲ相殖候ニハ村名主ヲ以、貧民ノ婦女ノ懷孕ヲ相改出產日ヨリ出生ノ子ノ十五歳マテハ母エ米二俵ツツモ毎年被下置候ハハ將來二十年計リニハ餘程農民出來可仕候」¹⁷⁾トイヒ又荏戸太華翁ノ樹人建議¹⁸⁾ニハ他地方ヨリ人口ヲ移植シ農事ニ力メシメ出生三年ノ手當一年ニ二三俵ツツモ與フルコト等ノ外、十五歳以下ノ子女四五人ヲ有スルモノニ對シ、村役ノ内ヲ用拾シ、又ハ村方申合せ其母ヘ相當ノ助力ヲナシ、五人ノ子女ヲ有スルモノニハ其母ヘ半人扶持ヲ給シ、又相當年齡ニ達シテ夫妻ナキ者ニハ村方心遣シ媒シテ匹偶セシムヘシ、又田畠少キモノニハ然ルヘキ土地ヲ附與シ、家内夫婦ノ多キモノハ別家セシムルノ方法ヲ探ルヘキコト等ヲ論ジタリ。

要スルニ當時、上述ノ如キ人口増殖策ヲ行フ

ノ必要ヲ認メタル學者ノ少カラサリシコト、及、多少コノ點ニ注意ヲ拂ヒテ之レヲ實行シタルモノノ存スルコトハ之レヲ知ラサル可ラス。吾人ハ近年歐洲某國ニ於テ行ハレツツアリトイフ強制人口増殖策ニ想到シ、之ヲ樂翁公ノ政策ト對比シ多少ノ感慨ナキヲ得ザル也。

17) 四大急務ニ關スル上書、寫本

18) 日本經濟叢書三十四卷137頁以下